

えて来た折柄なれば、妻女が夫君の武運長久を祈つて写経を
発願したのではなからうか。老母がこれを竈門八幡の神宮寺
へ奉納したものと考察せらる。筆者は神宮寺六坊中の光明寺
宗文以外には今の所認めらるゝ資料を缺いてゐる。次に写経
の期間であるが、文禄二年正月吉日とせしものが大部分であ
る。唯一つ才五十六十九のみは永禄二年十一月十九日となつ
てゐるから、少なくとも永禄二年末迄の日数を要したものと
思われる。才二百四十二の抹消してある弘治三年三月十二日
は何を意味するのであらうか。私は起筆の年月を暗示するもの
であると考えたい。大般若波羅密多經六百巻を只一人の宗文
老の手一つで一年間に完結する事は難事であると察せらるゝ
からである。若し初巻に近いものでも発見さるゝなれば此の
疑問は自然解消せらるゝ問題である。宮司土谷氏の其の時語
られし処に依れば、竈門八幡昇格願の書類作成資料に供する
為、国東町河野清実氏の手元に若干送付しありと聞けり。若
し之等が再び見得る事を得ば、考証は更に一步前進するであ
らう。

(大野郡三重町在住)

白杵流行之ちよんかれ

今泉 弥 佐 助

ヤレ／＼聞てもくんない、いがくり頭の乞食坊主が錫杖振

白杵流行之ちよんかれ

立／＼、くわん人坊主が一口ちよんかれ、聞てもくん称へ、
つゝら娘のどふ楽はじまり、比者翫鷹七十有余の隠居のじん
はり当時盛りの御歴々様をば、御床机頭とおなづけなされて
即座に退け、己が工みをどこそに隠して、忠臣願して政事は
勝手に、民家を悩ます摩王の根げん、御祭所か仏事もさせ称
へ、自分独りが栄花を極め、花の都の古原見るよな、朝から
晩まで琴や三味せん、淨留理長うた舞やら色事するやら、自
由するやらたか狩するやら、是こそ実の人面獸心、あげくの
果ニハお側をはなれぬ、ひけふの赤猫なでる斗り、さわるが
ほんのふ、これハどふじやと言ふが始り、後の入沢聞ずと
よし称へ、夫共見たくバおめの側なら、針箱さがして枕草紙
の四枚目見るよな、違ハ有めへいつの比より、どん腹ふくれ
て身持に成るやら、是に隠居も困たせんさく、どふしたもの
じやと気苦労するうち、思ひ付たる官市の始り、様子をさら
りと打明語りて、お宅に呼寄せお直に見せたる男ハ徳市、お
しけの身分でもつつけの幸ひ、名字放され大小取やら御扶持も
はなされ、隠居が中立、たまやが逆立、金屋の取持、聞て
目出度おかしい祝げん、又もや隠居はぼんのお乱れて、京都
のみめよき娘を呼寄せ、水あげなされてどん腹ふくると、百
石あたへて別家ニするやら、筋なき家ニも役義云付、見る人

聞人びつくりするやら、官市の結構世上の評判、さんげ斗か下からいたわる、お店といへ共国中迷惑、どふて下から考へみたれば、官市か利の卦で御上ハ損の卦、おむねの算木ニかんの卦見ゆれば、たゝんで仕舞ふが利こんな卦じや路ふ、俄に大水出たよふすご／＼かた付、きやつら夫婦もあんほんからくり取よな顔付、最早叶ぬ今では縁切れ、歎く人こそひとりもなければ、わずか二年ニたるやたらずに、栄花の世の中ながらも今では後悔笑止千万、余り長きハ御坐のさまたげ、是て切ます、くわん人坊主め

是ハ臼杵表より来ル、官市者、大造之金高拾三万両、右之内私欲、御家中より今度訴状御吟味之處、官市こと出奔、

右官市ハ二三年程村瀬氏取立、御家中御救として諸色上より買下し夫々売渡之處、亜墨利加渡来ニ付、武具馬具之取調ニ而先頃御取潰之由、右ニ付村瀬氏至而評判悪敷、当年ニ至ては御政事向ニ出不申候様ニ相成、右ニ付段々悪事之説も有之由ニ候

嘉永七寅江戸ニ而

備考

1. この「ちよんがれ」は昭和卅一年一月廿七日より三日間行つた、佐伯市でのIP郷土資料調査の際、今泉氏所蔵の多数の和書中より筆者が見出したもので、和紙四枚に書いてあつた。

2. これは臼杵藩の財政改革を行つた村瀬氏の緊縮政策を反対派が

当時流行のちよんがれに作つて、一般民衆に悪宣伝したものである。

3. ちよんがれは、うかれ節、ちよぼくれなどと同系統のもので、総称して江戸では浪花節と云われ、説教節、祭文から出た関西地方の語りものである。

4. 創始期のものは内容辞句ともに卑俗なものであつたが、江戸時代末期に物語、講釈、琵琶などを取り入れて今日の浪花節が大成したと。

5. ちよんがれは我が豊後地方では、明治中期頃まで流行した民衆芸能の一つで、浪花節芝居のことをちよんがり芝居、祭文聞きを、「ちよんがり聞き」とも云つていた。(立川輝信)

「大分県資料」編纂余聞

— 志賀道輝について —

三 木 俊 秋

「大分県史料」編纂のために文書を編年に整理しているところと色々と不可解な疑問にぶつつかる。それが古文書が沢山集まれば集まる程順次に解明されて行く場合も多いが、又新しい疑問に次々ぶつつかることも多い。次に掲げるのはほんの一例に過ぎない。

大友宗麟の股肱として幾多の戦争に従つて一番の重臣と